

コツの自覚に関するモルフォロギー的考察

三上 肇
福井大学

Über das Bewußtmachung des Kunstgriffs vom sich bewegenden Subjekt beim Bewegungslernen

Hazime MIKAMI

Zusammenfassung

Der Kunstgriff entsteht zugleich mit der Bewegungsgestaltung vor der Wahrnehmung vom sich bewegenden Subjekt. Es hat in der Praxis des Sports und des Sportunterrichts sehr große Bedeutung, daß das sich bewegende Subjekt sich den Kunstgriff bewußtmacht. Aber in Japan ist die exemplarische Forschung sehr wenig, wie der Kunstgriff entsteht und sich festigt.

In dieser Abhandlung wurde das Bewußtmachung des Kunstgriffs vom sich bewegenden Subjekt beim Bewegungslernen vom kinemorphologischen Standpunkt aus betrachtet. 3 Episoden wurden dabei behandelt, in denen der Beobachter(Verfasser) die Bewegungsempfindung einer Lernenden(A) über Felge vw. am Reck verfolgt hat. Frage und Antwort zwischen Verfasser und A wurden im Zusammenhang mit ihrer Bewegungsempfindung und ihrer Ausführung über Felge vw. beobachtet.

Die Frage vom Lehrenden an den Lernenden ist beim Bewegungslernen unentbehrlich, um den Lernenden eine wichtige Bewegungsweise wahrnehmen zu lassen. Es wurde klar, daß diese Frage erstens über das "Idealbild" der Übung, zweitens über das "Selbsturteil über Jetzt-Versuch" der Übung, drittens über den "Bewegungsentwurf über Nächst-Versuch" der Übung gestellt werden soll. Die vom Lernenden wahrgenommene wichtige Bewegungsweise wird aber nicht sofort zu seinem Kunstgriff. Deshalb muß der Lehrende dem Lernenden diese Bewegungsweise als einen Kunstgriff bewußtmachen. Und zwar muß der Lehrende immer wieder den Lernenden nach seiner Bewegungsempfindung fragen, damit der Lernende sie in der selbst komponierenden Bewegungsmelodie feststellen kann.

I. 問題の所在

われわれは普段の生活の中では、日頃行っている動きができるかどうか、どうすればうまくいくか、どうすれば失敗しないかなど、ことさら動きかたを考えたり、動きかたに特別な注意を向けたりはしない。さらに、動いた後に振り返ってそのできばえを省察することもしない。ところが、普段とは異なった状況、例えば凍った地面の上を歩くとときや怪我をした後の機能回復訓練の場合にはそうではない。凍ったところを歩くととき、歩きかたには特別な注意が向けられ、通常とは全く異なった歩きかたをする。滑って転ばないように、足の裏で滑りぐあいを確かめながら、おそるおそるゆっくりと歩くことになる。いつも何気なく行っている歩くという動きは滑るという状況に応じてかたちを変え、歩く動きのキネステーズがわれわれの意識の全面に躍り出てくる。滑ってバランスを崩したり、転んだりしながらも、「歩くことはできる」という暗黙の意識に支えられて、歩きかたのキネステーズは広がりを持つようになる。

キネステーズとはギリシャ語のキネーシス（運動）とアイステーシス（感覚）の合成語であり、フッサルによって運動と感覚との不可分な結合、ないしは運動としての知覚を意味する用語として用いられ、Bewegungsempfindung（運動感覚）とも表される¹⁾。

体育・スポーツでは、個々の種目固有の動きを習得していく過程において、児童・生徒やスポーツ選手が自らのキネステーズに注意を向け、その内容を把握することは特別なことではない。とりわけ動きの形成過程のいくつかの節目においては、自らのキネステーズに気づき、それを自覚することは、体育学習やスポーツトレーニングの重要な課題でもある。体育・スポーツの実践が日常生活の場合と異なるのは、意図的、計画的に動きを習得していき、その過程でキネステーズを把握し、確認し、意識化することによって動きのコツをより鮮明にし、さらに発展させる点にある。動きが「できる」という明確で具体的な意識内容は動きのコツに支えられており、したがって、体育

学習やスポーツトレーニングの現場では動きのコツには多大な関心が寄せられることになる。

コツという語は日常いろいろな場面で使われるが、動きのコツに限っても、「コツを教えてほしい」、「コツがわかればできる」ということを子どもでさえ口にするほど、われわれには馴染みが深い。ところが、日頃使われているこの語もそれは何ですかとあらためて正面から問われると、わかっているつもりでも、適切に表現することのむずかしさを感じる。

コツというどうしても個人的で主観的な内容をともなうから、客観性に依拠する精密科学ではコツそれ自体を研究対象にすることはなく、コツの背後に隠された因果律にもとづくメカニズムを導き出そうとする。このようなバイオメカニクスの・サイバネティクスの運動研究が主流となっているわが国においては、モルフォロジー運動学は非科学的であり、もはや時代遅れの学問として現代のスポーツサイエンスの背後に否定的に押しやられるべきと考えられてしまう²⁾。

だからこそ、金子は「スポーツモルフォロジー研究」^{3,4)}や『わざの伝承』⁵⁾のなかで、動きのコツについて現象学的・モルフォロジー運動学の立場から厳密な理論構築を行う際に、その学問性と精密科学との立場の違いをくどいほど説明せざるを得なかった。ここでは志向性・偶発性・可塑性が動きのコツの徴表ととらえられているが、コツを理解するための手がかりとして、まずはじめに、『わざの伝承』のなかからコツに関する記述を取り出しておきたい。

*「コツをつかんだ」ということは、…（中略）
…、その「動きかた」の要となることを自らの身体が了解していること…（傍点筆者）⁶⁾

*運動感覚身体知としてのコツ…⁷⁾

*コツという運動感覚体験は、たしかにアロゴスな暗黙知の次元にあり、かならずしも言表を保証しないことが多い…⁸⁾。

*動きかたは、自ら「つかむ」という志向性に支えられているけれども、それはすべて意識され、意図されるなかで、コツが了解されることを意味しない…⁹⁾。

*私のコツは、本原的に一回性の運動感覚体験

として与えられるので、初めての形態発生するときには、それを支えているのが運動感覚的意味核をもつコツであることに気づかないのだ。われわれが自らのコツの存在に気づくのは、間欠的にこの運動感覚的意味核に出会うなかにおいてである¹⁰⁾。

これらの記述から確認できるのは、動きのコツは自らの身体が覚えることであり、それは自らの運動感覚世界の中での体験であり、かならずしも言葉で表現できるとは限らないし、動く主体がそれを意識化できて、初めてその発生が認められるのではないということである。それゆえ、動きのコツは自覚される以前に、すでに動きのかたちが発生するとともにコツも発生すると解される。そうだとすると、動きのコツは、まず発生し、そして自覚され、さらにいくつかの位相を辿って変化していくことになろう。しかしここでは、運動主体がコツを自覚するのはコツが発生した後の段階だということだけを確認しておきたい。

このコツを自覚する段階に至るには、何気なく行ってきた動きをあらためて見直さねばならない。フッサールの現象学を詳細に解説した山口によれば、あらゆる意識活動が生じるとき、つまり、何かに気づき、何かを感じているとき、知覚しているとき、判断しているとき、はっきり自覚して意識が働いている場合、そのような意識を能動的意識、あるいは能動的志向性と呼ぶが、それは常に気づかずに起こっている受動的意識ないし受動的志向性が基盤として、前提としてすでに生じているという¹¹⁾。動きのコツの世界も同様である。すでに発生したコツに気づかない段階、なかなかとらえられない段階からコツを自覚する段階への移行は受動的志向性（意識）から能動的志向性（意識）への転換と考えることができる。そしてこれは、体育やスポーツの実践においては、きわめて大きな意義がある。

体育学習においては、「できる」と「わかる」との関連が取り上げられる。一口にわかるといってもいろいろな意味があるが、認知的学習としてここで問題となるのは、精密科学的計測および解析による科学知としての運動メカニズムではなく、動く主体の運動感覚世界で把握される実践知とし

ての動きのコツなのである。「子どもたちが相互に交流し合い、他者との関係のなかで自分のわかり方・でき方を意識し、高めていこうとすることで体育の授業が成立する」¹²⁾ように、子どもと教師の教わる－教える関係だけでなく、子ども相互の評価や教え合いという点でも、動きのコツを主題化することは、技能学習には不可欠な要件なのである。

一方、スポーツトレーニングでは、選手は種目固有の動きを意のままにコントロールできることをめざす。これは競技力の前提でもある。こころ一番という大舞台に立ったとき、選手は、その試合に期するものが大きければ大きいほど心理的動揺が大きくなり、のびのびと動くことが困難となって、トレーニングの成果を十分に発揮できなくなってしまう。そんな時に心の拠り所となるのが命綱であり、これこそが動く主体が自覚した動きのコツに他ならない。

しかし、自らが覚えるとはいっても、誰でもが自分自身でコツを自覚できるわけではない。自分がどのように動いているのかよくわからない者、自己の運動感覚をとらえられていない者にとっては雲をつかむようなことになろう。マイネルの言を引くまでもなく、体育学習であれ、スポーツトレーニングであれ、運動を意のままに形成し、操作し、修正する意識的な学習には、運動感覚が意識にのぼっていないければならないからである¹³⁾。そうすると、自己の運動感覚を把握できていない者がコツを自覚するには、第三者、主に指導者の手助けが必要とならざるを得ない。体育教師やスポーツのコーチは、練習環境の整備や、練習方法の提示を越えて、動く主体が自らの運動感覚を意識して把握できるように働きかけねばならない。ところが、「自らの現象身体で了解するコツは、当然ながら主体に強く絡み合っているから、他人がその私のコツを取り出すのはむずかしい」¹⁴⁾し、「コツは、他人には踏み込めない本原的な運動感覚能力という固有領域に属する」¹⁵⁾となれば、本人でさえよくわかってはいないコツに指導者はどのようにして向き合えばよいのだろうか。

動きのコツが体育・スポーツの実践に重要であるにもかかわらず、それがどのように発生し、ど

のように個人に定着していくのか、その具体的な事例的研究は現在ではまだ少ない。本論の目的は、鉄棒の前方支持回転について被観察者の運動感覚意識を追跡した事例を取り上げ、これに基づいて、動きを自覚するという点についてモルフロジー運動学の立場から検討を加えて、その問題性を明らかにすることにある。

II. 被観察者のプロフィール

被観察者（技の実施者）は富山大学教育学部2年生女子（以下Aと表す）である。大学ではバスケットボールの選手として活躍しているが、他の部員によれば、身体の動かし方は器用ではなく、無駄な動きが目立ち、ちょっとした怪我が多いという。大学1年次には筆者が担当する器械運動（実習）の授業を受講して、単位を修得しているが、授業の記録をみると課題の達成度は全般に低かった。筆者からみても、Aは身体の「しめ」がなく、自分の体をもてあましていく感じであり、他の学生に比べると技に取り組む際の恐怖心が大きかったという印象が強く、また強引に技を成功させようとすることもなかった。どちらかといえば器械運動は苦手の学生であった。

以下に述べるエピソードにかかわって、本人にこれまでの器械運動の経験をインタビューしてみると、中学校、高校では体育の授業で鉄棒を行ったことはなく、授業以外でも鉄棒に触れたことは一度もなかったことが明らかになった。昨年の授業で鉄棒を行ったのは小学校以来で、最初は怖かったと感想を述べているが、前方支持回転3回連続という課題だけは5段階評価の4であり、この技のできばえは低くはなかった。したがって、Aにおいては前方支持回転のコツはすでに発生していたと考えられる。

III. エピソード1と考察

1. エピソードという用語

本論では、事例を提示するためにエピソードという語を用いている。エピソード (episode) とは挿話、逸話を意味する言葉であるが、鯨岡は参加

観察（関与しながらの観察）の立場から事例研究を進める上でこの語を用いている。鯨岡によれば、参加観察の特徴は客観観察と間主観的観察というこの二律背反的な二つの観察態度を何とか同時に遂行しようというところにあり、その観察された内容としてのエピソードには、時間系列にそった出来事の客観的な記述が含まれるのはもちろんであるが、観察者による間主観的な解釈や理解が重要な意味をもっている¹⁶⁾。

鯨岡が行っている関与観察をスポーツの事例研究に適用する際の具体的な問題点についてここでは検討することはできないが、モルフロジー運動学で主題化される運動観察は、指導者が学習者に対する観察態度という点で、鯨岡の参加観察と同一の地平にあり、エピソードとして運動事象だけではなく、それに対する指導者の間主観的解釈や理解をも記述することは、ありのままの現実の事例の重要な点を浮き彫りにする一つの方法であると考えられる。

2. エピソード1

以下に述べるエピソード1は、筆者（観察者）が担当する器械運動演習の授業において鉄棒の前方支持回転を題材にしたときのエピソードである。この演習の受講生は全員が前年度に器械運動実習を履修していたので、一人ずつ順に前方支持回転を行わせた。

Aは失敗して支持になれなかった。マットに立ってしまったAは再び正面支持になり前方支持回転をやり直した。ところが、またも失敗してしまった。

Aは前方支持回転を2回行い2回とも失敗してマットに立ってしまったが、筆者の観察では、1回目と2回目の失敗の仕方は明らかに異なっていた。それに加えて、失敗した後の表情も異なっていた。

1回目は上半身が前に倒れていくときに、下半身がほとんど動かないで、上半身と下半身の回転が同調せず、身体が早い時期にたたまれてしまい、途中で回転の勢いがなくなってしまう失敗であった。失敗はしたけれども、そのときのAの表情には余裕があった。

2回目は、下半身の動きは確かに見られ、回転開始時の回転スピードが1回目より速くなったが、それによって身体をたたくタイミングが遅れ、鉄棒からはずれざる失敗であった。この失敗の後、Aは小さく「ええー…」といいながら1回目の失敗の後とは異なって、何となく暗い、自信のない表情になった。

筆者は異なる2回の失敗をみたとき、Aもほんのわずかの間に1回目の失敗を筆者と同様にとらえ、それを踏まえて2回目には『ある意図』を持って臨んだのだらうと解釈した。それなのに、自信をなくしたような表情になるのは、何か誤った理解をしたのではないかと思い、2回目の失敗の後Aが鉄棒から離れ次の学生と交代しようとしたときに、筆者は次の学生の実施を制し、Aに「2回目はどうしようと思って（前方支持回転をやったのか?）」と質問した。それまでは失敗しても誰にも質問などしなかったのに、いきなり質問されたAは戸惑いながらも、今の実施を振り返っている様子だったが、返答は「よくわかりません」であった。筆者は「思った通り言ってごらん」といったが、やはりわからないということだった。「間違っているでもいいから」と何度も返答を求めたが、結果は同じであった。

何もわからないはずはない、おかしいと思った筆者はAに「1回目に失敗したから、2回目は1回目と違うようにやろうとしたのではないのか?」と尋ねた。すると、Aは再び振り返るようにしながら、自信なさそうに「はい、回転がおそかったから」とポツリと答えた。この後の二人のやりとりは以下の通りであった。

筆者：「それで2回目は具体的にどうしようとした?」

A：「…回転を速くしようとして…」

筆者：「どうやって回転を速くしようとした?」

A：「…えー、…よくわかりません。」

筆者：「2回目は1回目よりもスピードはあったよ。」

A：「そうですねけど…」

しばらく間があいて、

筆者：「(身振りをまじえながら) 上体を前に倒すときに、足を後に引こうとしたんじゃない

のか?」

A：「あ、そんな感じです。」

筆者とのやりとりの中で、Aの表情にはあまり変化はみられなかったが、「あ、そんな感じです」と答えると同時に、嬉しそうな明るい表情になった。この返答とAの表情の変化から、筆者は明らかかな手応えを感じた。筆者にはAの中で何かほんやりとした感じが、あるかたちになったように受けとれた。

中断していた残りの学生が順に前方支持回転を行った後、全員に技術的なポイントを説明した。その説明の後に、受講生は2回～3回前方支持回転の練習をしたが、Aは同じような失敗をすることはなく、前方支持回転を成功させていた。それを見て筆者は、Aは前方支持回転のコツがわかったと判断した。

3. エピソード1の背景

この種のエピソードは、器械運動や体操競技の指導においては決してまれではない。日常的といってもよいかもしれない。それだけに、あまり取り上げられることもない。児童・生徒と教師、あるいは体操選手とコーチとの問答の結果、技がうまくできるようになると、一般には次の新たな課題へと目が転じる。2人の問答に特別な関心が寄せられない限り、振り返ってその内容や意義を話題にすることはない。

筆者には、自己の動きに気づく事例研究を通して何か新たな方法学的視点が見えてくるのではないかという漠然とした思いはあったが、今回の事例に対しては何の準備もなく、その出会いは全くの偶然であった。したがって、続けて生じたAの2回の失敗やその後の表情の変化、さらには説明後の練習におけるAの前方支持回転のできばえを客観的記録には残していないし、その練習でAがとらえたであろう技術的ポイント、いわゆるコツも確認していなかった。この点については後に取り上げることになるが、事例研究を進める上でこの点が不備であると気づいたのはしばらく経ってからであった。それは、この事例をエピソードとしてまとめるのに予想以上の時間を費やしてしまったことによる。

このエピソードはいくつかの段階を経てまとめられた。まずAとのやりとりと事実経過の記録をメモとして残し、次に筆者の間主観的な解釈と理解を整理し、それらを組み合わせ一つのかたちにした。これは、エピソードの原型と呼べるかもしれない。ところが、これは第三者にこの事例をわかりやすく伝えるというには程遠かった。全体の構成や個々の表現が適切ではなく、どうしても何度も書き改めなければならなかった。また、書き改めることで、観察者として筆者がとったAへの対応をあらためて何度も省察することができた。

4. 考察

ここでは、Aの前方支持回転の2回の失敗と筆者とAとの問答の内容が関係づけられ、各々の発言の意味が考察される。その前に、前提的理解として、前方支持回転の技術についてまとめておきたい。

(1) 前方支持回転の技術

前方支持回転の技術は「回転開始の技術」、「前屈技術」、「握りなおし技術」から構成されている¹⁷⁾。それぞれ以下に整理しておこう。

「回転開始の技術」は両腕をしっかり伸ばし、親指球をバーの上に乗せて、手のひらが八の字になるように握り、下肢を後ろに振り上げると同時に上体を一気に前に倒していくことであり、鉄棒を中心に上体と下肢がほぼ同時に大きな円を描くように回転していくことが次の前屈技術のときに全体の回転加速を保証することになる。

「前屈技術」は頭が真下を通過し、上昇していく局面でバーを上体と下肢ではさむようにして、鋭く前屈することで回転を加速する。

「握りなおし技術」は回転の最後の局面で手首を回してバーを握りなおし、身体を支えながら開始時の支持体勢に持ち込むことであり、またこの技の同一リズムでの安定した連続を保証している。

この3つの技術は個々に独立しているのではなく、それぞれが結びついて前方支持回転の成立を

支えていることはいうまでもないが、とりわけ、回転開始の技術と前屈技術はスピーディーな実施を保証するものであり、この2つの技術の機能的連関がこの技の生命線ともいえる。

(2) 2回の失敗の発生状況

1回目の失敗は回転開始時の動きかたに問題があったことはエピソード1に示した通りであるが、「下肢を後ろに振り上げる動き」がほとんど行われないうまま、上体を前に倒したために、早い時期に身体がたたまれてしまい、回転の加速ができなかった失敗である。すなわち、回転開始の技術にまず問題があり、それによって次の前屈技術が効果的に行われなかった。

2回目は「下肢を後ろに振り上げる動き」ははっきりと行われ、それによって回転開始後すぐに1回目以上の回転スピードがついたが、身体を小さくたむタイミングを逸し、鉄棒からはずされてしまった失敗である。すなわち、回転開始の技術は改善されたようだが、それと前屈技術がうまくつながらず、結局は前屈技術が効果的に行われなかった。

この失敗はどちらも小学校教員のための指導書の中で丁寧で紹介されているくらいだから¹⁸⁾、前方支持回転の典型的失敗例とみて良いだろう。また特に回転開始時の技術を見抜けないようでは器械運動の専門家としての資質が疑われてしまうほどである¹⁹⁾。したがって、ここで筆者がこの2回の失敗を見逃さなかったことは特筆すべきことではない。むしろ、前方支持回転の技術を理解し、現前化された動きのかたちの意味を観察できたことを前提として、この2回の失敗をもとに2回目の試みに対するAの意図およびAの表情の変化をどのようにとらえていたのかを明らかにしておくべきであろう。

(3) 2回目の試みに対するAの意図

この2回の失敗がそれぞれ別の人間によって生じたのであれば、それぞれは典型的な失敗例と見なされるだけであろう。しかし、この2回の失敗が1人の人間によって、しかも続けて生じたということに意味がある。どちらの失敗も回転開始の

技術、特に「下肢を後ろに振り上げる動き」と前屈技術との機能的連関に問題があった。したがって、回転開始時の下肢の動きに注目すれば、1回目はそれがはっきりと行われなくて失敗したのだから、この下肢の動きを効果的に行うために、上体が前に倒れるとき、それと同時にやや早く下肢を後ろに振り上げようとして2回目を試みたと考え、ここには明らかにAの2回目の試みに対する意図が見えてくるのではないか。筆者はそのように見た。

ところが、筆者の再三にわたる問いかけによくAが答えた内容は、1回目は「回転がおそかった」ということであり、だから2回目は「回転を速くしようとして」試みたのであった。しかも「回転を速くしようとして」と答えた後でも、どのようにして回転を速くしようとしたのかその具体的動きについては、よくわからないという返答だった。たしかに漠然とではあるにしろ、これがAの2回目の試みに対する意図であり、筆者が解釈したような、回転開始時の下肢の動かしがたは意識して行ったわけではないようであった。それは1回目の失敗を回転が遅かったとしかとらえられないで、下肢を後ろに振り上げる動きにその原因があったことには気づいていなかったからだと考えられる。ところが、Aはそれにあたかも気づいたかのごとく、2回目の試みではこの下肢の動きを行った。結果はうまくはいかなかったものの、これこそが、本人は気づいていないのにコツを了解していた身体が行ったと言えるのではないか。

下肢を後ろに振り上げる動きについては、その後筆者が身振りをとめないながら、「足を後ろに引くようにしたのではないのか」との問いに「あ、そんな感じです」と嬉しそうに答えた。それは回転を速くしようとして前方支持回転を行ったときに、自分でも知らず知らずのうちに下肢の動きを行っていたということにAは気づいたからであろう。

そうすると、Aは次から前方支持回転を行う際には、回転を速くするために回転開始時における下肢の動かしがたに注意を向けるはずである。この点を、後の練習でAが前方支持回転を成功させていたときに確認しておくべきであった。

(4) Aの表情の変化の意味

Aの表情はこのエピソードの中で何度か変わった。特徴的であったのは2回目の失敗の後と最後に「あ、そんな感じです」と答えたときである。

まず、失敗の後の表情の変化から振り返ってみよう。1回目の失敗の後にはAの表情にはまだ余裕があった。しかし、2回目の失敗の後には「ええー…」という言葉とともに明らかに自信のない表情に変わった。筆者の解釈では、1回目は失敗したけれども、それでもAには「前方支持回転はできる」という自信めいた暗黙の気持ちがあったからこそ、その気持ちが余裕のある表情に出ていたと思われる。また、それまでは失敗しても誰もやり直しなどしなかったのに、どうしてAはやり直しをしたのか。それはできるということを暗に示したかったからではないか。しかし、続けて失敗したことによって、できるという気持ちが揺さぶられ、「できると思っていたのにそうではなかったのか」という自信のなさが表情に表れたと考えられる。

1回目の失敗に対してAはその意味をはっきりととらえていなかったことはすでにみてきた。だから、2回目に対しても明確な運動投企を描けないうまま、できるという気持ちをもちつつも、ただ漠然と回転を速くしようとして2回目を試みたにすぎなかった。その2回目もまた失敗はしたが、その失敗の意味をしっかりと把握できていれば、簡単に自信をなくすことにはなりはしない。それが簡単に自信をなくしてしまったということは、Aは1回目と同様、2回目も自己の運動感覚意識の中で失敗の意味をとらえることができていなかったということであろう。

もう一回の変化は、Aが最後に「あ、そんな感じです」と明るく嬉しそうに答えた時である。2回目の失敗の後、突然筆者から質問を受け、返答に困りながらも、少しずつぼんやりしていたことがはっきりしてきて、ようやく自分の感じと一致した、その時であったと思われる。それはすでに述べたように、回転を速くしようとしたことが、回転開始時の下肢の動きを自分でも知らないうちに行っていたことに気づいたからであろう。

(5) 筆者と A との問答の意味

①動きについて問うことの意味

われわれは日常生活の中で自己の行為を何気なく行っていることが多い。それを第三者から指摘され、あるいは質問され、振り返ってそのとき自覚していなかった意図や思いにあらためて気づかされることがある。これは、体育学習やスポーツトレーニングにおいても同じようなことが言える。

ある動きができるようになって、「ときどきできる」、「何となくできる」という不安定なレベルでは、自分では気づかないままうまくできる一方で、それとは逆に、同じようにやっているつもりなのに、何度やっても思い通り行かないでジレンマに陥ることもある。このようなとき、教師やコーチの思いもよらない問いが動く主体の運動感覚意識に大きく響くことがある。

体育授業においては、そのときどきの状況に対応して、子どもの表情、しぐさ、発言、動作などの背後にある思考や感情を読みとることによって発せられるべき「発問」は、学習主体に「なぜ…」、「いかに…」という問いを芽生えさせ、教材をより深く追求させる機能をもつのであり、そのよしあしは授業前の教師の教材解釈の質によって規定される²⁰⁾。

金子は実践現場の勝れた体育教師、あるいはコーチは借問、すなわち次々とたまたみかけていく質問方式によって、自らの運動感覚を何ひとつ言葉にできない学習者から、現前化されている運動感覚能力のポイントを聞き出すことができることを指摘している²¹⁾。

発問が教材研究の質にもとづくと同様に、借問の場合でも、「伝え手自らの運動テキストの志向分析ができていることが観察前提になる」²²⁾ことは当然であろう。

発問とよぼうが、借問とよぼうが、指導者は動く主体の言葉になりにくい運動感覚を引き出すために、あるいは気づいていない点に注意を向けさせるために、その主体の運動感覚意識に迫り、それを掘り起こし、揺さぶるような問いを行わねばならない。一方、動く主体は、問いによって、それまで何気なく行っていた動きを積極的に意識し

て運動感覚世界の中で焦点化するように方向づけられ、ときには、同じ動きが全く異なる特徴をもった動きとして動く主体の意識に現れてくることもある。

② A に対する問いの問題

エピソード1における A に対する筆者の一連の問いは、すでにエピソードの背景でも述べたとおり、何の準備もないまま A の失敗に突然出会ったから、たしかに唐突であり、何の順序性もなく、借問と呼ぶにはふさわしくないだろう。A の 2 回目の実施に対する意図を確認し、「君のやろうとしたことは間違っていない」とその意図の正しさを教えようとして、「2 回目はどうしようと思ってやったのか？」といきなり問いかけた。漠然とはあっても、A から何らかの回答が返ってくると思っていた。しかし、結果は予想に反し、最初何度も「よくわからない」という答えしか返ってこなかった。これは、「自らの運動発生の分析をいかにげんにしたままの指導者」²³⁾と何ら変わりがないと批判されても仕方がない。たしかに突然の質問だったということもあろうが、それ以上に質問内容にこそ問題があったと思われる。ここで、A に対して行った問いを順に拾い出してみると次の通りであった。

「2 回目はどうやろうとしたのか？」

「2 回目は 1 回目と違うようにやろうとしたのではないのか？」

「2 回目は具体的にどうやろうとした？」

「どうやって回転を速くしようとした？」

「上体を前に倒すときに、足を後に引こうとしたんじゃないのか？」

あらためて A に対する質問内容を振り返ってみると、A の返答に応じて多少表現は変わっているものの、その内容はすべて 2 回目に対する意図を聞いているにすぎない。筆者は A の 2 回目の試みに対する意図にとらわれすぎていたようだ。それを問う前に聞いておかなければならないことがあったはずである。それを順に系統的に聞いていれば、A は今行った動きをより明確に想起でき、A はこの意図に関する問いにもある程度すなりと答えることができたろうし、また回転開始時の下肢の動きについてももっとはっきりと気づく

ことができたかもしれない。これは、伝え手自らが現前化された動きを的確に観察できていても、問いが突然で、問いの内容に系統性がないと、運動主体は返答に窮し、「よくわからない」としか言えなくなってしまうよい例であろう。それでは一連の系統性のある問いをどのように考えるべきであろうか。

③系統性のある一連の問い

コツを確かなものとするための練習では、「コツの可塑性を克服しようとして、自らの運動感覚意識をいっさい遮断して、ひたすら機械的訓練を繰り返す愚は避けなければならない」²⁴⁾とされている。そのうえ、1回ごとのわずかな類似や差違を運動感覚として確認できなければ、「次の偶発的なコツを志向する手立てをもてない」²⁵⁾ことになる。そうすると、1回ごとの類似や差異に動く主体が気づかないとしたら、それに気づくような問いが次の偶発的なコツを志向する手だてを問う前に必要であろう。さらに、1回ごとの類似や差異とは何と比較してのことなのか。何度かの試みを比較し、類似点・相違点を確認することもあるだろうが、その善し悪しを判断するには、さらに別の何かとの比較が必要であろう。その別の何かとは、本人が描いている、あるいはやりたいと願っている動きかた、すなわちその動きの目標像ではないか。この目標像と今行った動きとの類似点・相違点を比較することで、今の試みに対する自己評価が可能となるはずである。それをもとに次の試みに対して具体的に意識を向ける局面での動きかた、言い換えれば次の試みに対する意図、そして運動投企が明らかになってくるのではないか。このようにみえてくると、系統性のある一連の問いを以下のように整理することができるだろう。

- i . どのようなさばきを目標としているのか？
- ii . 今行った動きは、自分の目標の動きかたとどこが同じでどこが違っていったのか？
- iii . 次の試みをどのように行おうとしているのか？

系統性のある一連の問いは、まずは「目標像」、次にその目標像と実施した動きとの比較による「今の試みの自己評価」、さらにそれを踏まえて

「次の試みに対する意図」の順に確認しながら行うことになろう。ただし、それぞれ順に問いを続けていく過程で、返答に応じて、さらに細かな問いが立てられることは言うまでもない。そこでどんな問いが立てられ、それを確認するための試みが行われたにしろ、この3つの点を順に把握していくことには変わりはない。

この目標像、今の試みの自己評価、次の試みに対する意図の順に問いを続けていくことを可能にするには、指導者自らの運動テキストの志向分析を前提に、現前化された動きの意味を間身体的に読みとることが不可欠であることは言うまでもない。間身体的な読みとりとは、まさに金子のいう共感的運動観察における「潜勢自己運動」²⁶⁾、指導者の促発能力としての「代行能力」²⁷⁾、あるいは鯨岡のいう関与しながらの観察における「成り込み」^{28,29)}と同一の地平にある。

IV. 補足的エピソードと考察

1. 補足的エピソード

エピソード1における不備についてはすでにエピソード1の背景のなかで述べたとおりである。1回限りのこの事例をあらためて最初からやり直すことは不可能だから、この不備を何らかのかたちで補わねばならなかった。

そこで、エピソード1以降に、Aは前方支持回転の練習を行ったことがあるか否か、Aがとらえている前方支持回転の技術的なポイントは何か、これを確認するためにAに連絡をとった。そこで偶然にもAは前方支持回転を行うチャンスがあると言った。この時の筆者とAとのやりとり、そして数日後にその結果を基に前方支持回転について筆者とAとのやりとりをエピソード2とした。これは2回とも電話でのやりとりであったため、Aの前方支持回転のできばえやAの表情を見ることはできなかった。

さらに、Aの前方支持回転のできばえを確認し、それと同時にAが気づいているコツを再度確認するために、ビデオカメラで撮影しながら行ったAとのやりとりをエピソード3としてまとめた。

2. エピソード2

前方支持回転の授業（エピソード1）からほぼ6ヶ月後、筆者はAに前方支持回転の授業での問答について尋ねた。Aは授業で筆者と何回かやりとりをしたことは覚えていたが、何を聞かれ、何を答えたのかは全く思い出せないと言った。エピソード1の授業以降、前方支持回転を行ったことがあるかとの質問に対して、Aは「あの授業の後は前方支持回転を行ったことはありません」と答えた。さらに前方支持回転を今行おうとすればできるかという質問に対しては、「できると思います」とはっきり答えた。そして「来週鉄棒をすることがあるので試してみましようか」とAが言ったことを受けて、筆者はAに是非試して、詳しく報告してほしい旨を伝えた。

それから十日後、Aから前方支持回転を行ったという報告を受けた。そのときの二人のやりとりは以下の通りである。

筆者：「どれくらい前まわりの練習できた？」

A：「5回くらいやりました。」

筆者：「それで、うまくできたかな？」

A：「3回連続をしたんですが、なかなかうまくいきませんでした。」

筆者：「3回連続を5回やったということ？」

A：「はい。」

筆者：「練習しているとき誰かに教わったり、アドバイスされたりした？」

A：「いいえ。」

筆者：「そうか、それでうまくいかなかったというのは、具体的にいうと？」

A：「3回目がうまくいきませんでした。」

筆者：「3回目が失敗したってということ？」

A：「失敗したのは1回でしたが、あとは…スーツともどってこなかったです。」

筆者：「スーツともどってこなかったって、どういうこと？」

A：「…肘が曲がって、力が入って、滑らかでないというか…」

筆者：「楽に最初の体勢にもどらなかったということかな？」

A：「そうです。」

筆者：「それじゃ、スーツともどってくるのが良

い前まわりなんだね？」

A：「はい。」

筆者：「3回連続のときでも、1回ごとにスーツともどろうとしてるんだね？」

A：「はい。」

筆者：「それじゃ、スーツともどってくるためには、具体的にどうやろうとした？」

A：「…下あたりでグーツとスピードをつけることです。」

筆者：「その他で気をつけていたことは？」

A：「…最初、背中を伸ばして、頭を高くして、からだをたたまないように前に倒れることかな…」

筆者：「前に倒れるときに、膝とか足はどうしようとしてたかな？」

A：「…あんまり意識してなかったです。」

筆者：「動いているか、動いていないかどっちだったと思う？」

A：「…動いていたと思います。」

筆者：「どうしてわかる？」

A：「…からだをたたまないようにしてたから…」

筆者：「そうか、からだをたたまないというのは、背中を伸ばした最初の体勢を変えないままで倒れるということなんだ。」

A：「はい。」

筆者：「3回目がうまくいかなかったって言ったけど、1回だけだったらどうかな？」

A：「1回だけなら大丈夫です。」

筆者：「大丈夫というのは、いつでもできるという、そういう自信のことかな？」

A：「そうです。」

筆者：「今度、前まわりを一度みせてくれるかな。それまで練習しなくていいから。」

A：「はい、お願いします。」

3. エピソード3

Aと電話でのやりとり（エピソード2）の約3ヶ月後、Aが前方支持回転を行うのを直に観察し、何回かの試みとそのときの筆者とAとの問答がこのエピソード3である。

Aは約束の時間よりも早く体育館に来て鉄棒のセッティングをしていた。筆者が遠くからわざわざ

ぎ来たことを気かけ、自分はどうすればいいのかということを知ってきた。セッティングを手伝いながら、前方支持回転を何度か行い、そのつど筆者の質問に答えてほしいことを伝えた。セッティングが終了し、まずエピソード2以降1度も前方支持回転はしなかったこと、前方支持回転について授業などで話題にもならなかったことを確認した。

準備運動後、Aは久しぶりだから最初はアップですと言ったが、いきなり3回連続を行った。3ヶ月ぶりでもアップにしては、同じリズムで、力をつかった印象もなく、うまくできたと感じた筆者は、そのことをAに尋ねると、Aも同様のことを感じていた。そこで、エピソード2と同様に、どのようなさばきを目標にしているのかをあらためて尋ねた。それに対するAの返答、その後のやりとりは以下の通りであった。

筆者：「前に電話でどんな前まわりを目標にしているか聞いたけど、今も同じかな？」

A：「えー、なんて言いましたっけ。」

筆者：「おぼえてない？ スーッとどってくるとか、力を使わないでもどってくるとか言ったでしょう。」

A：「・・・はつきりおぼえていませんけど、そんなふうです。」

筆者：「それじゃ、またこの前と同じこと聞くけど、スーッとどってくる前まわりをするのに今はどうやった？」

A：「・・・真下のちょっと前からスピードをつけて、小さくなることかな・・・」

筆者：「スピードをつけながら小さくなるということかな？」

A：「そうです。」

筆者：「その他に注意してやろうとしたことは？」

Aは正面支持で背中を伸ばした体勢を示しながら、

A：「最初はからだを上を伸ばし、それから、頭が遠くを通るように倒れました。」

筆者：「頭が前に倒れるときに膝や足はどうしている？」

回転開始時の体勢を再び示し、前に倒れるような身振りとともに足を後ろに引きながら、

A：「足も一緒に動いていると思います。」

筆者：「それじゃ、今の話を整理すると、まず、倒れる前に上に伸びる。それから、上半身と下半身が一緒に動く。そして、真下の前あたりから、スピードをつけて、小さくなる。これでいいかな？」

A：「そうです。」

筆者：「それじゃ、もう一回前まわりを連続してやってみてくれる？」

A：「はい。」

Aは前方支持回転を4回連続して行い、4回目は力が抜けたようで支持にはなれなかった。筆者は「4回目は失敗したけど、3回目まではうまくいったのではないかとAに聞いたところ、Aは「2回目、3回目はスピードにのってよかったけど、1回目はスピードにのらなくて、ちょっと力が入ったかな」と答えた。そこで、「1回だけでいいから、スピードにのってスーッとどる前回りをやってほしい」と言って、Aに行ってもらった(写真1参照)。

その結果、筆者は4回連続の1回目よりもうまくいったと感じ、そのことをAに尋ねると、「さっき(4回連続の1回目)よりもうまくできました」との返答であった。

筆者：「さっきよりうまくいったのはどこがよかったからだと思う？」

ちょっと考えてから、

A：「倒れていくときに頭を遠くに倒すような感じでした。」

筆者：「さっき確認した倒れるときの下半身の動きとか、小さくなるタイミングはどうだった？ 思ったようにいったかな？」

振り返るようにしながら、

A：「はい、うまくできたと思います。」

筆者：「それじゃ、前回は1回だけだといつでもできるかな？」

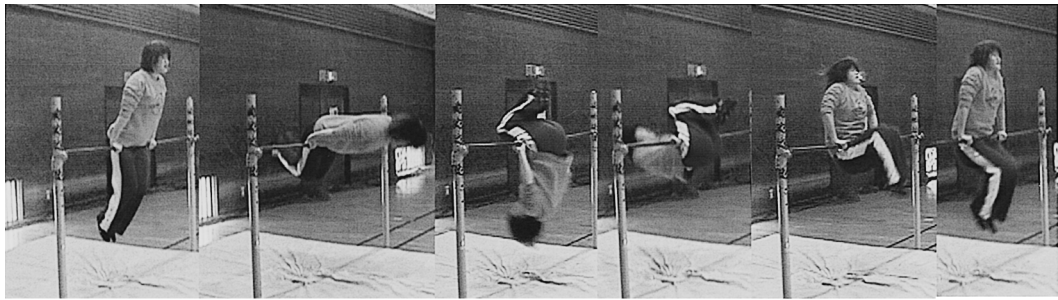
A：「はい。」

4. 考察

(1) 筆者とAとの問答の意味

①エピソード1からの進展

エピソード2・エピソード3はエピソード1と



① ② ③ ④ ⑤ ⑥

写真1 エピソード3におけるAの1回だけの前方支持回転

比較すると、Aから「わからない」という返答が1度もなかったという点で大きく異なる。これは、エピソード2では前方支持回転がどのようにできたかを筆者に詳しく報告するために、エピソード3では質問されることを前提に筆者の前で前方支持回転を行ったために、自己の動きかたを把握しようとする意識が強く働いたからであろう。

しかしそれよりも、エピソード2でも、エピソード3でもAは1回だけの前方支持回転ならいつでもできるという自信を持っていて、それを裏づけるコツを自分なりに把握できていたからではないか。

それに加えて、エピソード2、エピソード3ともに、筆者はエピソード1での反省を踏まえ、まず目標像について、次にその目標像を現実化するためのやりかたについての順で質問したことも、Aの返答を引き出すのによかった点ではなかったかと思われる。

② Aの前方支持回転の目標像とコツ

エピソード2とエピソード3ではAの描いていた前方支持回転の目標像とそれを現実化するためのコツを聞き出すことができた。Aは、エピソード2では、前方支持回転の目標像を「スーッともどってくる」と表現している。それは、力を使わないで、滑らかに、あまり肘を曲げないで正面支持になるさばきであった。これはエピソード3でも同様であった。

このようなさばきの前方支持回転ができるために、Aが自覚しているやりかた(コツ)は、エピ

ソード2とエピソード3では多少表現は異なるが同じ内容と考えられる。Aが最初に答えたのは「下あたりでグーッとスピードをつける」、「真下のちょっと前からスピードをつけて、小さくなる」という前屈技術にかかわる内容であった。次にとらえていたのは、「背中を伸ばして、頭を高くして、からだをたたまないように前に倒れる」、「からだを上へ伸ばし、それから、頭が遠くを通るように倒れる」という回転開始の姿勢から前に倒れていく局面、すなわち回転開始の技術にかかわる内容であった。

③回転開始時で下肢を後ろに振り上げる動きについて

余分な力を使わないで支持にもどるという目標像に対して、Aはそれを現実化する技術的ポイントとして、第一に回転を加速する前屈技術を、次に回転開始の技術を挙げた。ところが、回転開始の技術については、エピソード1でAが気づいたはずの「回転開始時で下肢を後ろに振り上げる動き」ではなく、むしろ上体の倒しかたの方であった。これは筆者にとっては意外であった。Aが目標としている「スーッともどってくる」さばきには、十分な回転加速が必要であるから、Aは回転を速めるためにこの下肢の動きに気づいたことで、この動きの重要性を理解し、これをはっきり自覚して前方支持回転を行っているにちがいない、と筆者は思っていたからである。しかし、Aはエピソード2でも、エピソード3でも、この下肢の動きを直接意識して前方支持回転を行ってはいなかった。

ただし、下肢の動きについて尋ねたところ、Aはエピソード2では「からだをたたまないように前に倒れる」と意識することが、回転開始時の下肢の動きを引き起こしていることには気づいていた。Aがエピソード1からエピソード2までの約半年間、この技の練習を1度も行わなかったこと、技術に関する情報も全く得ていなかったことを考えると、このからだをたたまないように前に倒れるというAの意識にはエピソード1における1回目の失敗が何らかの影響を及ぼしていたのかもしれない。

けれども、如何なる影響があったにせよ、前方支持回転を行った後に質問されてこの下肢の動きに気づいていることと、前方支持回転を行う前にこの下肢の動きを注意するポイントとして自覚していることとは大きく異なる。この回転開始時における下肢の動きに対するAの意識は、エピソード3でも同様であった。

エピソード2でも、エピソード3でも、Aは回転開始時に意識して下肢を動かしていたわけではなかった。Aは上体の倒れにともなった下肢の動きに気づいてはいたが、これは「運動の遂行にともなって受動的に与えられた知覚」³⁰⁾であり、この下肢の動きはAが前方支持回転を行う際に意識化された技術的ポイント、つまり自覚されたAのコツではなかった。

Aがこの下肢の動きをコツとして自覚していなかったのは、エピソード1においてこの動きにせっき気づいたのに、その後の練習でAが前方支持回転に何度か成功したまさにその時、筆者がこの下肢の動きの感じ (*Bewegungsempfindung*) をAに繰り返し確認することを怠ったからではなかろうか。

(2) Aの前方支持回転のできばえにかかわる筆者の評価

エピソード3では、何度もAの前方支持回転を観察することができた。Aが答えたように支持になる局面で多少スピードのなさはあったにしても、回転開始の技術の欠点は1度もみられなかった。前方支持回転の習熟が高まれば、膝を伸ばしたさばきが目標像となるが、膝を曲げたまま、

余分な力を使わないで、リズムカルに、何度も連続して回れることを筆者は優先し、実習の授業では同じリズムで3回連続することを課題にした。この点では、最後の1回だけの実施は(写真1参照)、回転開始時での積極的な上体の倒れに同調した下肢の動きもはっきりみられ、申し分のないできばえであった。この実施であれば、1回だけなら大丈夫というAの自信も確かにうなずける。

エピソード2とエピソード3において、Aは前方支持回転の中核技術である、前屈技術、回転開始の技術を把握していたこととエピソード3での実施のできばえを総合して判断すると、Aはこの技のコツを自覚しているとみていいだろう。しかも、エピソード2、エピソード3とも同じ内容の問いに対してほぼ同じ内容の返答であっただけでなく、エピソード2からエピソード3までの約3ヶ月間、Aは前方支持回転の練習を1度も行ったことはなく、さらに技術に関する情報も全く得ていなかったことから、Aはすでにエピソード2の時点において前方支持回転のコツを自覚していたと考えられる。

V. 結論

本論で取り上げた一連のエピソードにおいて、前方支持回転に対するAの運動感覚意識を追いかけ、Aはこの技のコツを自覚していることが確認された。しかしAが自覚していたコツ、とりわけ回転開始の技術に関しては、筆者の予想とは外れていた。エピソード1において、Aは回転開始の局面での下肢を後ろに振り上げる動きに気づいたことによって、それ以降ではこの動きをコツとして自覚していると筆者は思っていた。ところが、エピソード2とエピソード3でAがとらえていたコツは、回転開始の技術に関しては、下肢の動きではなく上体の動きの方であった。これは、運動主体が無自覚的に行っている動きかたに気づいたからといって、またそれが技術的に重要な動きかたであるからといって、それが直ちにコツとして自覚されるとは限らないということである。

すなわち、探索位相から偶発位相のレベルでつかまれたコツは運動主体には気づかれなまま無

自覚的にとどまるから、これを自覚させて図式化位相に持ち込むには指導者の働きかけが不可欠であり、特に運動感覚意識について問いを積み重ねていくことが重要である。それによって受動的意識が能動的意識へと移っていき、運動主体があらためて自己の動きを見つめなおす契機となる。この問いの内容は系統的で順を追ってなされるべきであり、指導者と運動主体との運動感覚の交信によって、運動主体はそれまで気づかないで行っていた自己の動きかたに気づくことができる。さらに、運動主体が重要な動きかたに気づくだけでなく、その動きかたをコツとして自覚できるためには、運動主体が自ら奏でる運動メロディーのなかにその動きの感じ(Bewegungsempfindung)を何度も確認できるように問うことも指導者の役割と考えねばならない。

鯨岡の「あまりにも当たり前すぎる事象、当たり前であるが故にみんなが見過ごしてしまうようなできごとやエピソードのなかにかえって非常に大事なものがあります³¹⁾」という言葉に揺さぶられた後に、エピソード1に出会った。そのときの驚きと、不可解さをエピソードとしてまとめようとしたのが本研究の始まりであった。興味のある事例は突然、そして偶然に目の前に現れ、一回限りで、やり直しがきかない。それを逃さない鋭い感性と適切に表現できる豊かな知性の必要性を痛感させられた。

文 献

- 1) 鷺田清一：キネステーゼ，木田元他編；現象学事典，弘文堂，1994，89-90頁。
- 2) Kaneko, A.: Zur Bedeutung der ästhesiologischen Morphologie von Prof. Kurt Meinel, スポーツモルフォロジー研究第5巻，1999，34頁。
- 3) 金子明友：こつの構造（上），スポーツモルフォロジー研究第4巻，1998，1頁以下。
- 4) 金子明友：こつの構造（下），スポーツモルフォロジー研究第5巻，1999，1頁以下。
- 5) 金子明友：わぎの伝承，明和出版，2002，220頁以下。
- 6) 金子明友：同書，220頁。
- 7) 金子明友：同書，222頁。
- 8) 金子明友：同書，226頁。
- 9) 金子明友：同書，244-245頁。
- 10) 金子明友：同書，274頁。
- 11) 山口一郎：現象学ことはじめ，日本評論社，2002，114-117頁。
- 12) 小林一久：「できればよい」授業から「わかる」「できる」授業への転換，学校体育47巻，12号，1994，16頁。
- 13) マイネル（金子訳）：スポーツ運動学，大修館書店，1981，125頁。
- 14) 金子明友：前掲書，242頁。
- 15) 金子明友：同書，221頁。
- 16) 鯨岡 峻：両義性の発達心理学，ミネルヴァ書房，2001，70頁以下。
- 17) 金子明友：鉄棒運動，大修館書店，1984，338-339頁。
- 18) 林 恒明：鉄棒運動の授業，体育科教育別冊37巻，5号，1989，39頁。
- 19) 南部和美：器械運動の技の指導に関する基礎的研究，福井大学教育学部卒業研究，1994。
- 20) 阪田尚彦：発問，宇土正彦監修：学校体育授業事典，大修館書店，1995，51-52頁。
- 21) 金子明友：上掲書，524-525頁。
- 22) 金子明友：同書，524頁。
- 23) 金子明友：同書，524頁。
- 24) 金子明友：同書，265頁。
- 25) 金子明友：同書，265頁。
- 26) 金子明友：運動観察のモルフォロジー，筑波大学体育科学系紀要10巻，1987，122-123頁。
- 27) 金子明友：上掲書，526-529頁。
- 28) 鯨岡 峻：関係発達論の構築，ミネルヴァ書房，2001，133頁以下。
- 29) 鯨岡 峻：事例研究の質を高めるために－関与観察とエピソード記述の周辺－，スポーツ運動学研究第15巻，2002，10-12頁。
- 30) 朝岡正雄：スポーツ運動学序説，不昧堂出版，1999，239頁。
- 31) 鯨岡 峻：前掲書，2頁。

（平成15年9月4日受付）
（平成15年9月24日受理）